

# 若林

WAKABAYASHI

## 「防災」からさらに「減災」へ

医療法人社団 杏仁会 河原町病院 事務長 菅井 裕子

各地に甚大な被害をもたらした東日本大震災、近年多発している大型台風などによる水害。これらの災害が「防災」から「減災」を意識するきっかけとなりました。

大震災は、既存の常識を根底から覆し「想定外」の現実を私たちに突き付けました。入院患者様の安全確保や周辺被災者に対する診療業務を慌ただしくしていたことを覚えています。また職員自身も被災者であり、その中で勤務スタッフを確保し、病院機能を保つことに大変苦労しましたが、職員の協力や周辺住民の皆様のご理解ある対応のおかげで何とか当院も震災を乗り切ることが出来ました。このような体験から大災害の直後より入院患者様や被災者の皆様、及び地域住民の方々のために一医療機関として医療サービスの提供を継続出来る体制作りの重要性を感じ、防災訓練等の地震対策に一層努力してまいりました。

一方で津波を含めた水害に関しては当院の地理的環境から少々無縁のものと認識していたように感じます。しかしながら平成28年8月に発生した台風10号により、岩手県の高齢者施設において、近くを流れる河川が氾濫し、施設内に水が流れ込んだため、死傷者が発生するという報道を受け、当院においても「避難確保計画」を作成し運用することといたしました。昨年発生した台風19号の際には、厚生労働省からの異例の注意喚起、各種メディアによる被害予想を受け、当院でも地下の浸水対策や停電に備えた医療機器等の対応、食糧備蓄等の確認をしました。

当日は周辺道路の冠水する中で救急搬送への対応、待合室での避難者の受け入れ等を速やかに行う事が出来たと思いますが、これらもしかるべき準備の成果であったと感じます。

大規模自然災害の発生は、抑制できるものではないことが多く、日頃からの「防災」意識は非常に重要であり、当院においても職員の意識改革からマニュアル作成、消防との連携等可能な限りの「防災」対策を実践しています。

一方、先の大震災のように「想定外」の災害が起これば「防災」対策の備えを越えるダメージを受ける可能性もあります。大規模災害時はいかなる備えがあっても被害が発生するという考えのもと、人命をあずかる病院としては、その際に被害を最小限に抑える「減災」の意識を持つ事も非常に重要であると考えています。現在当院では「防災」からさらに「減災」の意識を併せ持つ施設作りを模索しています。被害の程度が大きくなると想定される部分については積極的な改修工事を行い、被害発生時でも病院が機能できるだけのスタッフ確保に努めていきます。現在「減災」は防災まちづくりの一環として注目されており当院のような街の、地域の、小病院が災害時に機能できれば防災まちづくりに貢献できるとも考えています。

災害を経験し病院という特殊な施設の責任者の一人として、「防災」に対する病院としての備えや意識改革を進め、今後は「減災」についての対応が急務になります。「現在の当院での取り組み」をより一層発展させ過去の災害経験を無駄にしないよう努力していく事が何より大切であると感じています。

